

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ

スタディ・ツアー 多くのことを学び無事帰国

チェルノブイリ救援・中部が企画する3回目のスタディ・ツアー（9/18～28）は出かける前にアメリカでテロ事件があり、出発しているものが非常に心配しましたが、何事もなく無事終わりました。

今回のスタディ・ツアーには一般公募で全通の組合から若い森さんと苅谷さん、組合の年齢制限からは外れたけれど自費でぜひ参加したいと白井さん、看護学校で勉強に忙しかった谷口さん、それにチェル救メンバー6名の合計10名での出発でした。ウクライナではデネシ・サナトリウムを拠点に、汚染地域であるナロジチ、ジトーミル市内にある州立小児病院、市立小児病院への訪問、そして今回最大のイベントであるデネシ・サナトリウムでの交流会と忙しいスケジュールでした。サナトリウムではたくさんのお子様も私達のイベントに参加して日本のことを吸収しようと意欲的でした。おかげでこの子供達が何らかの病気でここに来ているのだという事を忘れさせるのでした。多くの事を学び、多くの人々に会えたスタディ・ツアーでした。スタディ・ツアーを見守っていただいたみなさんありがとうございました。（大谷早苗）



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10：00～17：00）

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.com

スタディ・ツアー

こぼれ話



「自然・鉱物博物館」へ移動中。公園の木々が色づき始めている。美しい教会が建ち信仰の深さを物語っている。「宇宙博物館」へも案内された。



「ジトーミル消防署」で、チェルノブイリ原発事故の事故処理作業の犠牲者に献灯、慰霊碑に献花する。代表はマスコミに、コメントを求められた。



「チェルノブイリ博物館」を見学。事故直後の写真や家に残されたアイコン、ベレストロイカ後に発表された、機密文書などが展示されていた。



全通職員のリクエストにより、始めて「郵便局」を訪問した。こちらの郵便カラーは青、ちなみに帰りに寄ったウィーンでは黄色。所変われば…でした。



通訳の応援を、鹿児島県出身の「五代裕己」さんに頼みました。通訳だけでなく、日本の文化紹介の「折り紙」でも奮闘してくださいました。



ウィーンでは、シェーンブルン宮殿近くに宿泊し、地下鉄を利用して、シュテファン寺院周辺や美術史美術館・王宮を見学。ホイリゲ（居酒屋）やコンサートも楽しみました。

初の交流会は大成功 !!

滞在地ジトーミル市のデニシ・サナトリウムでの最終日、9月23日(日)に、“日本デー”と称した交流会を行いました。これは、初の「チェルノブイリ被災者・ジトーミル市民/チェルノブイリ救援・中部スタディ・ツアー参加者」の交流会です。

まず、サナトリウムのメイン廊下の壁を利用した二つの写真展。一つは、広島の原爆写真展。50枚セットの貴重な原爆被災の記録で、日本国内でも見るチャンスがめったにないものです。もう一つは、現代の日本の風景、大都会名古屋の光と影、神社、田園風景などを、自分たちで写したものです。人々は、初めて見る日本の風景に興味深げに見入っていました。



午前10時から、救援・中部の河田昌東事務局長の講演会「エネルギーの未来に向けて」。400人収容の大きなホールで、サナトリウム滞在の子どもたちのほか、奨学生、病院の医師たち、ジャーナリストたちも、ウクライナの希望ある未来に向けたメッセージに耳を傾けました。

午後は、グループ交流会。三つのグループに分かれて1時間半にわたり、語り合いました。(P. 6参照) その

後、会場を変えて、日本伝統文化の紹介。

食堂の一角では、着物や浴衣を着て、簡単な茶道の実演を行いました。日本から持参した簡易の茶道具と干菓子で、60~70人分の抹茶をフル回転でたてました。意外だったのは、大人より、子どもたちのほうが、残さず飲み干したことです。

生け花は、まずデモンストレーションでスタッフが活け、そのあと子ども達に指導をしながら、思い思いに活けてもらいました。美的センスはなかなかのもので、どれも個性的な仕上がりとなりました。

折り紙は、黒山(金山?)の人だかりの中、男4人が汗水たらして鶴を伝授しました。鶴に象徴された日本の文化を自分の手で克服した満足感に、子ども達は満面の笑顔を見せていました。



救援という面だけでのお付き合いではなく、もっと広く深く、お互いの民族、歴史、文化などを知りたい、理解しあいたいとの思いから企画した初の取り組みが、果たしてうまくいくのか、人々が興味を感じて参加してくれるだろうかと心配でした。でも、案ずるより実行、大成功でした。(T)

チェルノブイリの風にふれて(郵便局員:白井次郎)

さすがに凝縮された日程の濃さに、重いものを抱えてのキエフ発となった。

サナトリウムでの交流会は、若い14~15才の子らとの話合い。自分の子どもと比較してしまうが背丈はもう大人。21人の未来を担う彼らは「日本の暮らし」に興味を持ち、「私が日本に行きたいと言ったら、受け入れてくれますか?」「日本語は、難しいですか?」「なぜ日本の子はウクライナにホームステイに来ないのですか?」と、質問が続いた。私は、少し恐い質問をした。「あなた方の中で、将来この国を出たいと思っている人はいますか?」アリョーナという子が手を上げ、「ドイツに行きたい。」と答えた。イタリアも好きだが、フランスは嫌いだと言う。隣のユーリヤという子が「私はフランスが好き!」と発言。しかし、今ウクライナという母国を捨てる子はひとりもいなかった。

彼等にとって、ここが未来に渡っての大地である。原発事故による、忍び寄る病魔は更に進行している。これから知るいくつかの事で、彼等はウクライナを捨てるだろうか。私は、日本で「祖国」とか「国家」という言葉をあまり使わないが、彼等の未来をチェルノブイリ事故は「奪った。」しかし、取り戻そうと闘う消防士等大人達がいる。あまりにも多くの子ども達と出会い、子ども達の笑顔を、びた。そこにひとつの光として講演会での「燃料電池」というアイデアと、繋がりとしての「日本文化紹介」という企画を持ち込んだスタディーツアー。「物資を与える」だけに終わらない、明日に繋がるボランティアを感じた。

P.S. 10年の蓄積の上に甘えた旅だった事を少し恥じ、「こういう国だからこそ明日のエネルギーを…」と語る、力強さにブーディモ(乾杯)!!

たくさんのありがとう!(看護学生:谷口明子)

「たくさんの人と出会いたい」「温もりに触れ、人々と生活を共にしたい」「素敵な体験がしたい」そんな期待を胸に救援・中部を、そしてウクライナを訪ねた。

「ジトミルに健康な子どもは100%いない…。」そんな言葉を聞いて、淋しく不安な気持ちで一杯となる。私はこんなにも元気で、こんなにも呑気に贅沢なのに…。子ども達は私達を可愛い笑顔で迎えてくれた。日本語しか、否、日本語すら危うい私。くるくるお目眼で見つめ、話を聞いてくれるのだ。いろいろなお話をしてくれ一緒に遊んでくれるのだ。たっぷりと遊んでもらい、本当は迷惑がっていたのかも知れないが、凶々しくも少し通じ合えたような嬉しい気持ちで一杯だ。病気と闘う子ども達から、温もりとパワーをもらい、私が勇気付けられ元気になっていく。「私が彼や彼女等にしてあげられる事は何だろう…?」「私に何ができるだろう…?」と悩まされる。今後の重要な宿題だ。毎日、美味しく豪華なおもてなしをしてくれた皆さん。「フレンド!」そう言って抱きしめてくれたおばさん。夜中まで語って(!?)くれたおじさん。プロポーズしてくれたおじいさん。可愛いワンちゃん。おいしそうなキノコ達。白の混じったオシャレなカラス。子ども達だけでなく、ジトミル全体が温かかった。日本での、日々何かしに追われた心の希薄さを、改めて情けなく淋しく思う。それから、市立小児病院でも忘れられない、忘れてはならない出会いがあった。そこには、小さな小さな命が苦しみ闘っている。不足した機器に祈る事しかできない私…救いたい救って欲しい、多くの“いのち”を! この10日間で今後の私に影響することは必至だ。救援・中部の皆さん、郵便屋さん、ウクライナの皆さん、今回支えてくれた全ての皆さんにスパシーヴァ!感謝しきれないたくさんのありがとうを、今後も学びつづける事に代えさせて頂きたい。あらゆる地を訪ねて心に触れ、人のいきる(活きる)姿を胸に成長していき



「ウクライナ」をみて(全通職員:森 孝正)

「ウクライナ」と聞いて、ピン!とくる人は少ないが、「チェルノブイリ」という名はある程度の年齢の人なら知っている。そんな国で見て聞いて感じたことを記していきます。

首都キエフから西方にある、ジトーミルに滞在し消防局を訪ねました。ここでは、原発事故の処理作業をしているうちに自身も被曝し、命を落とした署員のご冥福を祈りました。彼等をそれに向かわせた原動力が、何であったのかは分からないが、慰霊碑の前で手を合わせた時、彼等の無念さや、やりきれなさを思うと胸にこみ上げてくるものがあり、また残された家族のことを考えるとそれは更に増すばかりでした。州立小児病院では、放射能の影響で、生まれながらにして障害を持った子ども達が入院していました。表情が豊かで、外見からはその事を微塵にも感じさせないところが、逆に様々な想像をかきたて、悲しく切ない思いになりました。しかし、暗い話ばかりではなく、明るい希望の光も見えました。滞在先であるデネシ・サナトリウムには、主に理学療法やトレーニングを目的としてやってきた、たくさん子ども達と交流の場を持つことができ、子ども達のパワーやエネルギーに圧倒されました。勉強小とつとつとみても、日本の子どものように、ただ漠然とやるのではなく、自分の目標に繋がっていくものに励み、ディスコダンスでは自己表現の巧みに驚きました。「この少年少女が大人になり、将来ウクライナの基盤となる。」その事を思うと楽しみで、自分のことのように嬉しくなりました。今回のスタツアに参加し、自分に何ができるのかをずっと考え、ここで分かりました。この子ども達のパワー・笑顔・ひたむきさや“原発の起こった可哀想な国”ではなく、“これからが楽しみな国”であることを日本の多くの人に伝えることだと。

一つ増えた幸せ(全通職員:苅谷政宏)

スタディ・ツアー参加中、常に痛感し続けたことがある。それは、もっと事前に、「ウクライナのこと」「救援・中部のこと」を勉強してから、参加すれば良かったことである。知っていたのは、「ウクライナ」「チェルノブイリ」という、単語だけであった。

「チェルノブイリ原発事故」に関しても、どれだけの規模の事故であり、それが環境や人体に及ぼした影響がどれほど大きかったのだろう。強制移住地域ナロジチの広大な土地や立入禁止の看板を見れば、無知だった私にもその恐ろしさが伝わってくる。しかし、それが国全体の像と結びつかない。

また、私達に対する盛大な歓迎や至る所で耳にした、現地の人からの感謝の言葉…。自分にとって気恥ずかしい感があった。サナトリウム・市立小児病院・消防署などで見た数多くの救援・中部のステッカーが、それを物語っているが、救援物資や支援金を遙かに上回るこれまでの経過や努力、心情的な交流もあったに違いない。

出発前のある程度の準備をしていれば、きっと見たい物、知りたい事が広がり、吸収できたことも大きかったらと思う。しかし、このような思いを持つことができたのも、実際にウクライナ(ジトーミル)の地を自ら見て歩き、サナトリウムでの屈託のない、生き生きとした笑顔の子どもたちと出会い、そしてそこで生活している人々と、わずかながらの会話ができただけなのに他ならない。今回の機会がなければ、ウクライナは日本とは遠い遠い国としての印象に留まり、自分の頭の中では決して広がることはなかった。

事前に知らなかった分、これから少しずつウクライナのことを勉強していきたい。日本国内にしか目が向けられなかった私に、気になる国が一つ増えたことは幸せなことだ。



グループ交流会 そ・う・か・つ

●第一グループ「奨学生と語る—私の夢・あなたの夢」

奨学生たちとの交流は、最初は緊張で硬い表情だった彼女、彼らも、日本の若者の率直な問いかけに、自分たちの学生生活についてや趣味、夢を語ってくれました。今まで、写真と名前だけでしか知らなかった彼らが、いきいきと若者らしく、屈託のない笑顔を見せながら語る姿に、ウクライナの新しい国づくり、明るい未来を期待できると思いました。



●第二グループ「被災者の実態と救援の問題点」(参加者の意見の抜粋)

☆妊婦の 85%は栄養失調や貧血などの障害があり、新生児出生数は毎年 1,000 人ずつ減少している。それは、チェルノブイリ事故の放射能被曝の影響だけではなく、貧困によるものである。血液腫瘍センターは発足しているが、血液がん(白血病など)の二次感染予防のために無菌治療室を作りたい。

☆「過去は語られても、現在は語られない」。河田さんの講演は、ウクライナのエネルギー関係の人に聞いて欲しい内容だった。日本人と話し合い、夢(メンタリティー)について考えるのは良い機会だった。友情は時によって検証されると言います。まさに我々の関係が事物だと時と共に実感している。



☆ウクライナが独立して 10 年経ったが、ますます貧乏になっているような気がする。無料だった医療制度もなくなってしまったし、被災者に対する適切なリハビリ施設もない。チェルノブイリと関わった年月や支援のおかげでなんとか生き延びてきました。

●第三グループ「私たちの生活—日本とウクライナ」

主にマーリーン、コーラステン(汚染地域)に住む 13 歳から 17 歳までの子どもというよりは若者達 21 人が参加。3つのテーマの中では一番身近な話題だったので、子ども達から積極的に発言・質問がありました。例えば、食べ物やお酒について、日本の学制、運転免許取得方法についてなど、いかに若者達が日本に関心を持っているかが伺える質問でした。



2001年度の奨学生募集が始まりました

ウクライナは9月が新学年です。移住基金との調整に手間取り、新学年開始には間に合いませんでしたが、ただいま奨学生の募集・選考が行われています。

2000年度(今年8月まで)には、教育大10名、医療専門学校12名、農業生態学アカデミー4名、合計26名の奨学生がおり、このうち医療専門学校の5名が卒業します。かわりに2001年度には、教育大5名、医療専門学校8名、農業生態学アカデミー4名をあらたに採用する予定です(農業アカデミー4名は、汚染地区からの医科大学進学者がいなかったため、それに予定していた枠の流用です)。その結果、2001年度の奨学生総数は38名になります。

奨学生制度ができて3年目を迎え、いちおう定着したといえますが、同時にいくつか実情に合わない点も出てきました。たとえば、当初私たちが一番期待していたこと 汚染地区で働く医師を養成するために汚染地区出身で医科大学に進学する学生を金銭的に支援するは、汚染地区から医科大学に進学する学生がいないので、まだ実現していません。そのために確保してある2名の枠は、2000年度と2001年度は、農業生態学アカデミーに回されました。この問題をどうするか。

さらに、学校や課程によって異なりますが、最終学年は4~6月で終わり、卒業してしまいます。現行の制度では、その場合でも8月まで奨学金を支給することになっています。卒業時点で支給をうち切ってもよいのでは、という意見もあります。

これらの点について、これから移住基金と議論をして、必要があれば2002年度から制度を一部変更することになります。

ここで奨学金制度の資金計算について説明しておきます。

奨学金は、2年次から卒業まで支給されます。その期間は教育大と農業生態学アカデミーは4年、医療専門学校は2年(1年の場合もある)、です。医科大学については1年次からの支給で6年です。1人につき年間240ドル支給します。したがって、教育大5名、医療専門学校8名、医科大2名を採用しますと、 $(5 \times 4 + 8 \times 2 + 2 \times 6) \times 240 = 11520$ となります。つまり、これらの学生が卒業するまでにあわせて11520ドルを支給することになります。これと同じ数の新規採用を7年間続けますと、1ドル 120円で計算すれば、総計で9,676,800円になります(生態学アカデミー3人が医科大2名に相当します。2000、2001年度に4名ずつ採用しているのは、99年度の採用者数が少なかったためです)。

この他に事務経費がかかりますが、それを含めれば当初準備された1千万円で賄うことができる計算です。寄付金もありますから、資金の余裕があれば、当初の予定の7年を経過しても新規採用を継続します。

(田中良明)

外務省NGO事業補助金（正式名：国際開発協力関係民間公益団体補助金）

交付額 3,420,000 円決定（申請額は 5,262,200 円）

今年度も外務省のNGO事業補助金交付を申請し、配分が決定しました。今年は例年より交付の決定通知が随分早く届きました。配分の内容は、①汚染地域のナロジチ病院への医薬品代 ②事故処理作業者の医薬品代 ③フェニールケトン尿症の子ども達のための特殊ミルク ④栄養学専門家による事故処理作業者の栄養学的調査と指導のための専門家派遣事業 ⑤車椅子や修理済み医療機器等を送るための輸送費、となっています。

また、この補助金の交付条件として、補助金額と同額以上の自己資金事業の実施ということがあり、今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（山盛）

＜補助対象経費＞

A. 保健衛生事業

専門家派遣事業（旅費・通訳代） 422,000 円

B. 医療診療事業

薬剤費 1,921,000 円

薬剤特殊ミルク代 744,000 円

C. 援助物資輸送費 333,000 円

合計 3,420,000 円

全通よりの寄付金も決定!!

7月初め、名古屋NGOセンターより「旧愛知県公労協加盟労働組合の活動費の一部を寄付金として、全通労働組合を通じて30万円を寄贈され、それを3口に分けて10万円ずつを3団体に寄贈したい」との話がありました。

今夏より、愛知県国際交流協会の申請との関連で、車椅子キャンペーンを行っており、1台でも多くの車椅子をウクライナに届けたいとの思いで、申請しました。

そして待つこと約ひと月、この間に愛知県国際交流協会の方は、「活動資金が3000万円を超える団体への交付は行わない」との方針で却下され、がっかりしていたところ、朗報が届き、みごとGET！この寄付金で州立小児病院と市立小児病院に1台ずつ、小児用車椅子を寄付することになっています。

今後、民・官問わず、助成金申請に力を入れていきますので、皆さまもぜひとも情報をお寄せください。

（市原）

マリヤの最初で最後の話…「ウクライナ講座」



<なぜか男性参加者の多かった講座でした>

8月18日(土)伏見ライブプラザにおいて、第4回ウクライナ講座「ウクライナのいまどきの若者事情」を開催しました。講師のマリヤ・イワフネンコさんは、1年前に来日したときより更に磨きのかかった流暢な日本語で、お盆休みの最中にも関わらず集まってくださった参加者の方々を、2時間半たっぷり魅了させてくれました。

ウクライナの若者について、日本の若者以上にディスコやクラブで遊ぶことが好きな半面、家族や友人をととても大切にするという心豊かで優しい面や、日本以上に厳しい就職問題など、多岐にわたっていきいきと語ってくれました。「日本の常識はウクライナの非常識」と思わず苦笑させられる場面が、何度もありました。

そして、ウクライナの行く末にわが身を重ねて真剣に案じているマリヤの姿は、ウクライナの若者の光と影を象徴しているようで、強く考えさせられました。

9月末、スタディ・ツアーとちょうど入れ違いに帰国をするというマリヤ、またウクライナで会うのが楽しみです。

さて、次回のウクライナ講座は、10月20日(土)午後1時30分より名古屋市教育館(栄⑤番出口)にて、「スタディ・ツアー報告会」です。今回のスタディ・ツアーの最大のイベントは、なんといっても『市民・被災者との交流会』です。これまで支援している団体のメンバー以外の人たちとは、なかなかじっくり交流することができず、もしかして私たちは、本当の被災者の声を聞いてはいないのではないかという危惧感から、このイベントの発案・企画に至ったわけです。

この初の試みに向けて、スタ・ツアー・スタッフは深夜に、チャットのごとくメール交換でプランの検討に予断がありません(9月7日現在)。そのほかに、原発事故15年後の汚染地域の現状など、スタ・ツアーならではの報告が満載。お誘い合わせの上、ぜひお越しください!

そして、「ウクライナ講座」のトリ、「ウクライナの料理ーボルシチをつくろう!」<12月15日(土)午後1時30分より 場所未定>も、忘れずに予定に入れておいてください。チェルQの忘年会になること間違いなしです☆

医療支援活動報告と募金活動

臨床工学技士 北野 達也

本年2月に医療支援活動を終え、帰国してからあちらこちらで「国際医療協力活動について」講演依頼があり、現地の状況報告の機会を頂いている。

その際、パンフレット、会報等配布し、チェルノブイリ原発事故の恐ろしさや事故により被災された方々の現状を知って頂く場となっている。

9月1日は「災害の日」であるが、私は医療機器メーカーであるフクダ電子(株)より医療従事者向け教育講演「呼吸療法における安全管理3部制」(3時間)の講演依頼を受け、この日、壇上にあがった。受講者は400名を超え大盛況であった。活動報告ではなく呼吸療法に関する勉強会であったが、現地の医療施設の現状を写した10数枚のスライドを用意し、講演の中で報告させて頂いた。会場ではパンフレット、会報の配布、そして、募金箱、写真パネルの設置など受講者の足を止めていた。講義休憩の間、受講者の方々は熱心にパネル展示を御覧になり、多数の方々が募金をして下さり、さらにはフクダ電子名古屋販売(株)代表取締役 永井 凱巳 様からの御寄付、私共の+αを含め、募金額30,977円となりました。このお金はチェルノブイリ救援・中部を通し、責任を持って被災者の方々に届けたいと思います。

受講者の方々をはじめ、我々の活動を理解し、募金箱の設置を快く引き受けて下さったフクダ電子名古屋販売(株)のスタッフの方々、本当に有難うございました。



<常滑市立西浦南小学校で

「福祉・ボランティア」授業の特別講師を行う>

<活動報告>

2001. 4. 15 (日) 石川県にて

第10回 石川県臨床工学技士会総会記念講演

2001. 5. 27 (日) 千葉県にて

第11回 日本臨床工学技士会学術大会

2001. 5. 14 (木) 知多市にて

第6回 知多半島臨床工学技士会セミナー

2001. 5. 21 (木) 常滑市にて

常滑市立西浦南小学校

「福祉・ボランティア」授業特別講師

2001. 5. 23 (日) 富山県にて

第2回 中部臨床工学技士会学術大会



<医療従事者向け教育講演で

ウラケの医療設備の現状を報告>

今後もこのような活動報告の場を通し、多くの方々に関心を持って頂き、御協力願えればと存じます。

恒例の
クリスマス・ミルクキャンペーン&クリスマスカードキャンペーン
の季節となりました

秋も深まりを増し、読書の秋、食欲の秋と、それぞれの秋を満喫されていること
と思います。そしてやがてクリスマスが近づき、チェルQが今年最後のお願いをす
る季節に突入するのです…。

放射能で汚染されていないミルクは、ウクライナの子ども達にとっては命綱。皆
さまのご協力お願いいたします。そして、子ども達が心待ちにしているクリスマス
カードも、あわせてお待ちしております。そこで、今年のカードはウクライナ語で
書いてみませんか。前号でお約束したとおり、ウクライナ語のメッセージの書き方
をお教えします。ぜひ挑戦してみてください。

З Різдвом Христовим!

(Marry Xmas!)

Бажаю щастя та міцного здоров'я!

(Be happy and healthy)

Нехай щастить вам!

(Happiness will be with you)

☆カードは12月14日(金)必着とします。

☆カードは封筒に入れ、封はしないで、さらにひとまわり大きい封筒に入れてお送
りください。お送りくださったカードに折鶴などを入れ、メッセージスタンプを
押して、移住基金に送ります。そして、クリスマスと新年に合わせて、病院や孤
児院の子ども達に届けられます。

ウクライナを旅して(2) 南へ

(オデッサ、ヤルタ) 戸村 京子

西への旅からジトミルへ戻り、消防局でアントニウクさん、チュマクさん、バロージャさんに篤くお礼を言い、諸費用を払って、9月の再訪を約束してお別れする。キエフでは、知りあいのニーナ、ワレンチンご夫妻宅に、ホテルの予約をキャンセルして泊めてもらうことになった。彼らはロシア語で話し、私は学習途中で2年以上ご無沙汰のロシア語でのおぼつかない会話。また竹内さんにご面倒をかけてしまう。

ご主人は今、失業中。ああそうか、チェルノブイリ原発が閉鎖になったから、と少し間を置いて気づいた。彼らは原発で働いていた。前のスタディ・ツアーで訪れたプリピャチ市の話になり、「私たちの家は、あそこの建物の2階だったのよ」とニーナさん。彼女はさらに細くなっていた。



<キエフのカフェで(イーラ・オクサナ・戸村)>



<夜行寝台列車・コンパートメントのリュウバさん>



<オデッサ港“戦艦ポチョムキン”の階段>

キエフではまた、日本留学から戻り、今は日本大使館で働くイーラと彼女のお姉さんのオクサナとも再会し、竹内さんと4人で、街路樹のカシタンが白く咲く街を歩き植物園へ。異国で、知り合いに会うというのは、とてもうれしいものだ。

5月2日、今度は南のオデッサ・ヤルタへ。この旅にはリュウバさんに付き合ってもらい、中年女性の二人旅。ウクライナでの長距離移動は、夜行寝台列車に乗り、朝には目的地に到着するというパターンだ。ホテル代が節約できるが、大波に漂うかのような揺れと、寝かせてやるものかといわんばかりの停発車時の騒音で、とても安眠できない。それでも私は、映画に出てくる、あこがれのコンパートメントでわくわくしながら窓の景色を眺め、停まった駅の様子に見とれる。「いつか見た古い映画のよう」というのが、この旅のキーワードとなる。

リュウバさんは、私にプレゼントする刺繍がもう少しで出来上がるからと、せっせと手を動かす。彼女とはウクライナ語。丁

寧にやさしく話してくれるので、私も知っている言葉を総動員させ、いろいろ話し合う。

朝、着いたところは、黒海の港町オデッサ！

日本から3ヶ月かけて救援物資の船便が着く港町は、どんなところだろうといつも想像していた。あの有名なエイゼンシュテインの映画

「戦艦ポチョムキン」の階段がここだ。プーシキンの博物館を皮切りに、博物館、美術館を全部歩き回った。往時はとても立派であったと思

われる建物が、疲れ果てた様子でたたずみ、一

歩その中へ入ると、さまざまなお宝が詰まっているのだ。ホテルは、きっと私の生涯ただ

一度きりの贅沢、古い映画に出てくるような、ダンスを踊るの？というような部屋。オデ

ッサは、明るい開放的な雰囲気のある街だった。また夜行列車に乗って、クリミア半島のヤル

タへ。ツバメの巣というお城や、ヤルタ会談のおこなわれたニコライ2世の宮殿など

を訪れ、その豪華さと、部屋の管理をする質素な老婦人との落差に、ため息…。「これが

私たちの国の現実よ」とリュウバさんは言う。チャーホフの家博物館は、ふと、先ほどま

でトルストイやゴーリキーが座っていたかのように感じられるほど、きれいに、調度品も

そのままに保存されていた。

ラフマニノフが弾いたピアノもあり、チャーホフが丹精こめて自ら作った庭は、と

てもすてきだった。ヤルタはなるほど、町

じゅうが庭園のような、緑や花々の美しい、

人々のあこがれる保養地なのだ。お世話にな

ったニーナ家などへクリミア・ワインを

お土産に買い、翌朝キエフに戻った。

リュウバさんのご主人バロージャさんが、

帰りを待って作ってくれたボルシチは

とてもおいしかった。昼過ぎの飛行機に乗

る私は、お世話になった人々とあわただしくお礼を言って別れ、空港へ向かった。

今回の旅で、またたくさんのウクライナ

のお知りあいが増えた。私がこの一人旅で

最も困ったのはやはり言葉。といっても、

日常の生活上の言葉はほとんど問題はなく、

ただ、自分の感じた印象や感動、受けた親切や配慮に対する感謝の言葉を知らないこ

とだった。これを伝えられなくては、コミュニ

ケーションとは言えないと、つくづく

感じたことだった。(終)



<オデッサの古い建造物>



<“ヤルタ会談”の行なわれたリヴァディア宮>



<チャーホフの家博物館>

事務局便り

うれしい便りです。大垣市のKさんの文通相手、2月に私がコーラスステンでお会いしたザクーシロ家から手紙が来ました。

「今日、娘のオリガがジトミルの医療専門学校に合格した通知を受取りました。どんなに私達が幸せな気持ちでいるか解ってください。この幸せを日本のお友達と分かち合いたい。」とありました。看護婦コースに入ったとのこと。

きっとオリガさんは足の不自由なお父さんや病気がちのお母さんのことを思いやっつてのことでしょう。彼女の澄んだ瞳が思い出されます。私達の奨学金を受けてもらって、元気に勉強してくれますように！

先にご紹介した<5年ぶりの手紙>のオリガ・プリマクさんに私が返事を出したところ、折返しお手紙をいただきました。家族の写真も添えて。

彼女は27才の主婦で、6才で学校に行き始めた男の子と、4才の女の子がいる。夫は働いている。住んでいるのはウクライナではよく知られた石炭製錬所があった所だが今は閉鎖されて、労働者は働き場がない。彼女のご両親と妹さん達は近いところに住んでいて元気である。問題はいっぱいあるけど、子ども達を育てる事が第一、「がんばらなくちゃ」という明るく健気な文面でした。

私事ですが一身上の都合により名古屋を離れることになり、9月末で事務局を辞めさせていただきますことになりました。6年余りの間、本当にお世話になりました。仕事の中で最も印象に残るのは、皆様からいただくカンパ受入のそれでした。毎日のように送られてくる振込み用紙の向こうに、一人一人のお顔と思いが、だんだん見えてくるような気がしてお礼を書きましたが、もし何か失礼があったとしたら、どうぞお許してください。

この仕事から、他者への自分の思いはきちんと形で表し続ける事が大切だということも学ばせていただきました。ありがとうございました。
(松田)

編集後記

☆ウクライナは、まだ“黄金の秋”ではなかった。たくさん子ども達に会い、奨学生達に会い、知人達にも会えた。大きな“実りの秋”だった。
(京)

☆スーツケースの中の、旅の思い出を整理できていないまま、編集に取りかかる。思出だせば、添乗員なしの団体旅行、よくもまあ何事もなく無事に帰ってきたことか…。(美)

☆日本人とウクライナ人が混ざり合っている、髪の色と、足の長さ、顔の大きさで、すぐ見分けがつくんだよね。
(佳)

☆テロとその報復で、世界中が揺れ動いている。しかし、テロに対する日本の使命は、「調停」と「難民救済」であり、絶対に「参戦」であってはならない。なぜなら、テロや報復に使われる兵器は、アメリカなどの先進国が、金儲けのために乱造・乱売したものであり、本当のテロは彼等(=武器供給者)なのだから。
(J)

